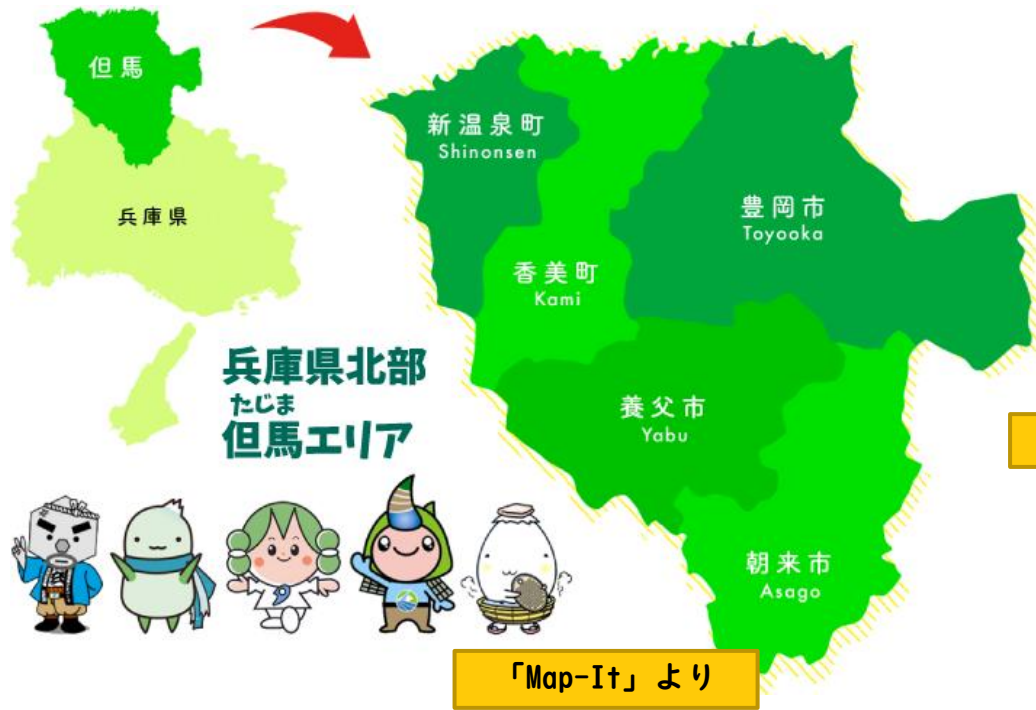


【報告】

地域との連携の意義 ～お互いを知ることによって生まれる価値観～

兵庫県立和田山特別支援学校 教諭 西岡 敬生

「コウノトリの野生復帰」



「県立コウノトリの郷公園HP」より

黒毛和牛の祖「田尻号」



「香美町観光ナビ」より

- ▶ 全国の黒毛和牛の祖 誕生の地
- ▶ 酒米二大代表品種
 - 「五百万石＝新潟県・山田錦＝兵庫県」
- ▶ コウノトリとトキの歩み
 - 野生復帰・農法・環境保全

「但馬を代表する地酒 香住鶴」

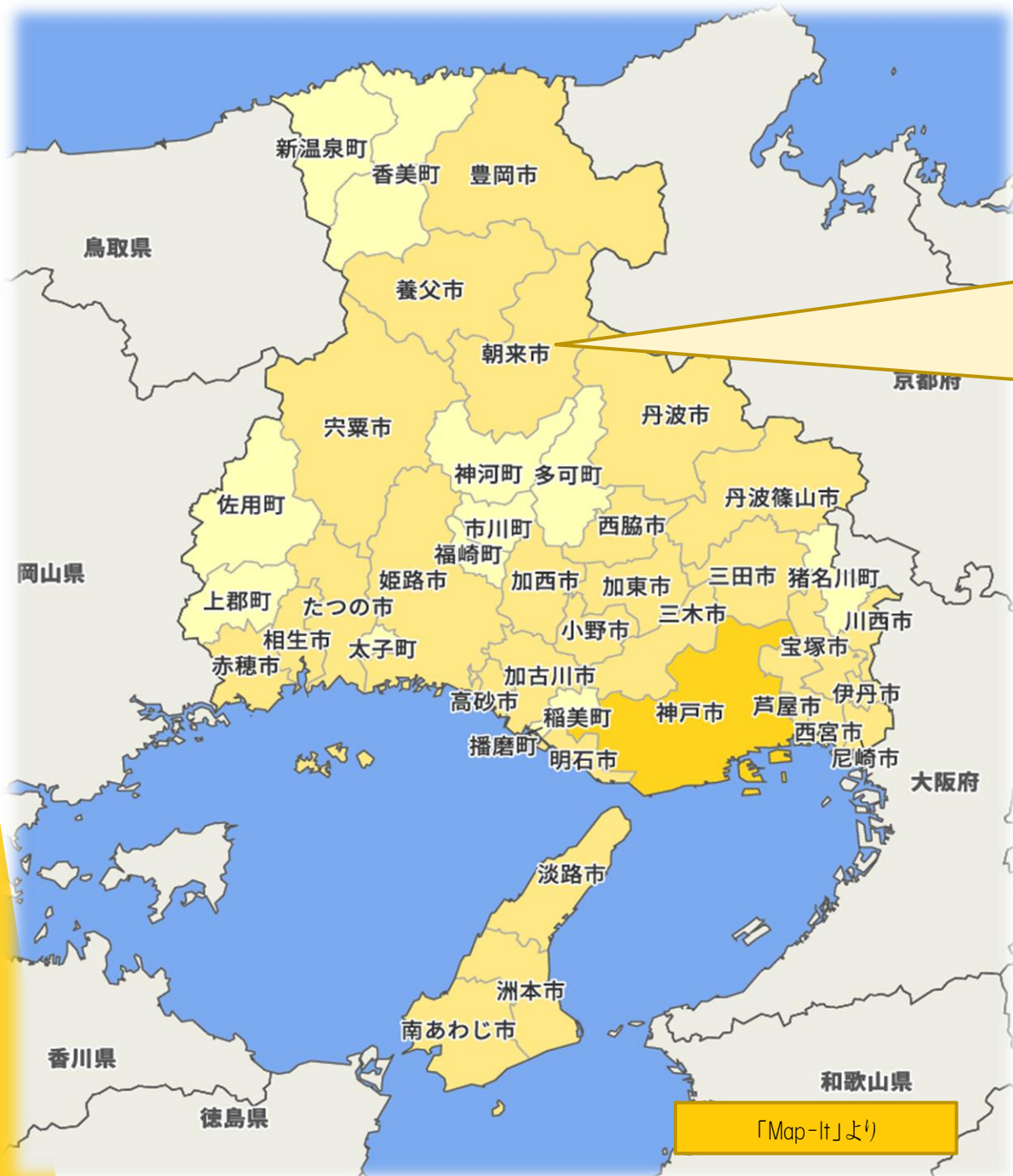


「株式会社香住鶴HP」より

1. はじめに — なぜ「地域との連携」なのか

地域連携を「支援してもらう関係」から「共に価値を生み出す関係」へ

- ・ 和田山特別支援学校は、但馬地域に位置する学校
- ・ 小学部から高等部まで、多様な障害のある児童生徒が学ぶ
- ・ 卒業後の生活・就労を見据えると、学校の中だけでは完結しない
- ・ 地域の方々、企業、教育委員会（市町）等との接点を、学びの場として捉え直した



兵庫県立和田山特別支援学校



「Map-It」より

「Map-It」より

2. 地域課題 — 障害者雇用をめぐる

「障害者を雇う」以前に、互いに「知る」機会が少ない

- ・ コロナ禍後、雇用環境は回復傾向にある一方、人手不足・人材確保の課題がある
- ・ 企業側には、障害者雇用に関する不安や「何を任せればよいか分からない」という状況もある
- ・ 学校側にも、企業の仕事内容・職場環境・求める力を十分に知る機会が少ない
- ・ そこで「実際に会う・見る・やってみる」機会をつくることにした

3. 実践①「しごと体験フェア」



写真1 当日の会場の様子（令和5年度）

「特別支援教育研究」No.816号(2025.8月号)より

兵庫県中小企業家同友会との取組

- ・ 企業から協力を得て、さまざまな業種の仕事を体験
- ・ 仕事の内容だけでなく、働く意識・コミュニケーションも学ぶ
- ・ 企業側も、生徒の可能性や強みに触れる機会となった

「仕事を体験する」＝「自分の可能性を知る」

イメージは、「キッザニア」



しごと体験フェア — 「本物」に触れる

企業ごとに異なる仕事を、実際の道具・機械・商品等を使って体験

業務体験 梱包・包装、事務、車両整備や部品の組み立て、カフェ業務、
スマートフォンの分解・バッテリー交換など、企業ならではの仕事

対話 「働く」とは何か、仕事の先にどんな思いがあるのかを聞く

しごと体験フェア — 生徒に見られた変化

- ・「やってみたい」「成功させたい」という気持ちが生まれた
- ・自分から質問したり、確認したりする姿が見られた
- ・集中して取り組む姿や、普段とは違う表情が見られた
- ・「仕事ができるか」だけでなく、「自分は何が得意か」を考える機会になった

キャリア教育としての価値：経験 → 気づき → 自己理解 → 次の挑戦

しごと体験フェア — 企業側にも変化が

学校と企業の「相互理解」が、次の連携を生む

- ・ 企業側から「生徒の姿を知ることができた」という反応
- ・ 学校側からも、企業の仕事内容や求める力への理解が深まった
- ・ 「障害者雇用」の話をする前に、「一人の人」として出会うことができた
- ・ 次年度以降の継続、拡充につながる動きが生まれた
- ・ 実習の受入れ、就Bからの雇用に繋がる
- ・ 地域の障害者雇用に係る循環課題についても可能性がある

4. 実践②「和特ふるさとプロジェクト」

～地域の教育委員会との連携～

- ・ 朝来市・養父市内の小中学校、地域の教育委員会と連携
- ・ 現場実習を「地域で学ぶ」機会として位置付ける
- ・ 地域の学校・公共施設等で、児童生徒が実際の仕事を担う
- ・ 学校の枠を越え、「地域の一員として働く」経験へ

「地域の中で役割を持つ」ことを、学びとして保障する

和特ふるさとプロジェクト ― 実習の場を広げる

- ・ 給食準備室での作業
- ・ 牛乳ケースを運ぶなど、学校運営を支える仕事
- ・ 清掃・環境整備など、日常の中にある役割
- ・ 教職員や児童生徒とのやり取りを通して、働くことを実感



写真3 本校実習生（左）が給食準備時間に実習先
小学校児童（右）へ準備室で牛乳ケースを手
渡す様子

「特別支援教育研究」No.816号(2025.8月号)より

「自分が役に立つ」実感が、自己肯定感・就労意欲につながる

実習生を知る教員が、たくさん成長を認めてくれる環境

和特ふるさとプロジェクト — 「お世話」から「相互理解」へ

- ・ 実習生を「お世話する」だけではなく、仕事を任せる
- ・ 「障害があるから難しい」という見方から、できると、強みを見る
- ・ 実習を通して、地域側にも障害特性への理解が生まれる
- ・ 児童生徒と実習生の双方に、互いを知る機会となる



写真4 本校実習生（右）が職員室での清掃業務を行う様子

「特別支援教育研究」No.816号(2025.8月号) より

5. 二つの実践から見えてきたこと

生徒

経験を通して
自分の強みに気付く

学校

地域の仕事・人材・環
境を教育資源として
捉える

企業・地域

障害を「知る」ことで
関わり方が変わる

一方向の「支援」ではなく、双方が学び合う関係へ

6. 「お互いを知る」ことで生まれた価値観

「障害があるからできない」ではなく、「どうすればできるか」を一緒に考える

- ・ 企業・地域：障害特性だけで判断せず、一人ひとりの強みを見る
- ・ 学校：地域の側にも専門性・強みがあることを学ぶ
- ・ 生徒：自分にも社会の中で担える役割があると実感する
- ・ 関係者：互いの「分からなさ」を、実際の経験と対話で埋めていく

7. 地域連携を「キャリア教育」として捉える

- ・ 仕事を知る → 自分を知る
- ・ 人と関わる → コミュニケーションの力を育てる
- ・ 役割を担う → 社会参加の実感を得る
- ・ 振り返る → 次の目標・進路につなげる

地域連携は、卒業後の就労支援
だけではない

在学中から
「地域の一員として生きる経験」を
積み上げる

8. 成果と今後の課題

成果

- ・ 地域との接点が継続的に生まれた
- ・ 生徒の主体的な姿が見られた
- ・ 企業、地域側の理解が深まった
- ・ 学校外の環境を教育資源として活用できた

課題

- ・ 連携を担う人材、時間の確保
- ・ 地域ごとの資源差への対応
- ・ 一過性で終わらせず、継続・拡充する仕組み

9. まとめ

お互いを知る



「できない」を決めつけず、
「どうすればできるか」を共に考える



生徒の可能性×地域の可能性＝共に生きる地域社会

10. 今後に向けて ― 地域との関係を次の世代へ

「地域に理解してもらう」だけでなく、
「地域と一緒に地域をつくる」特別支援教育へ

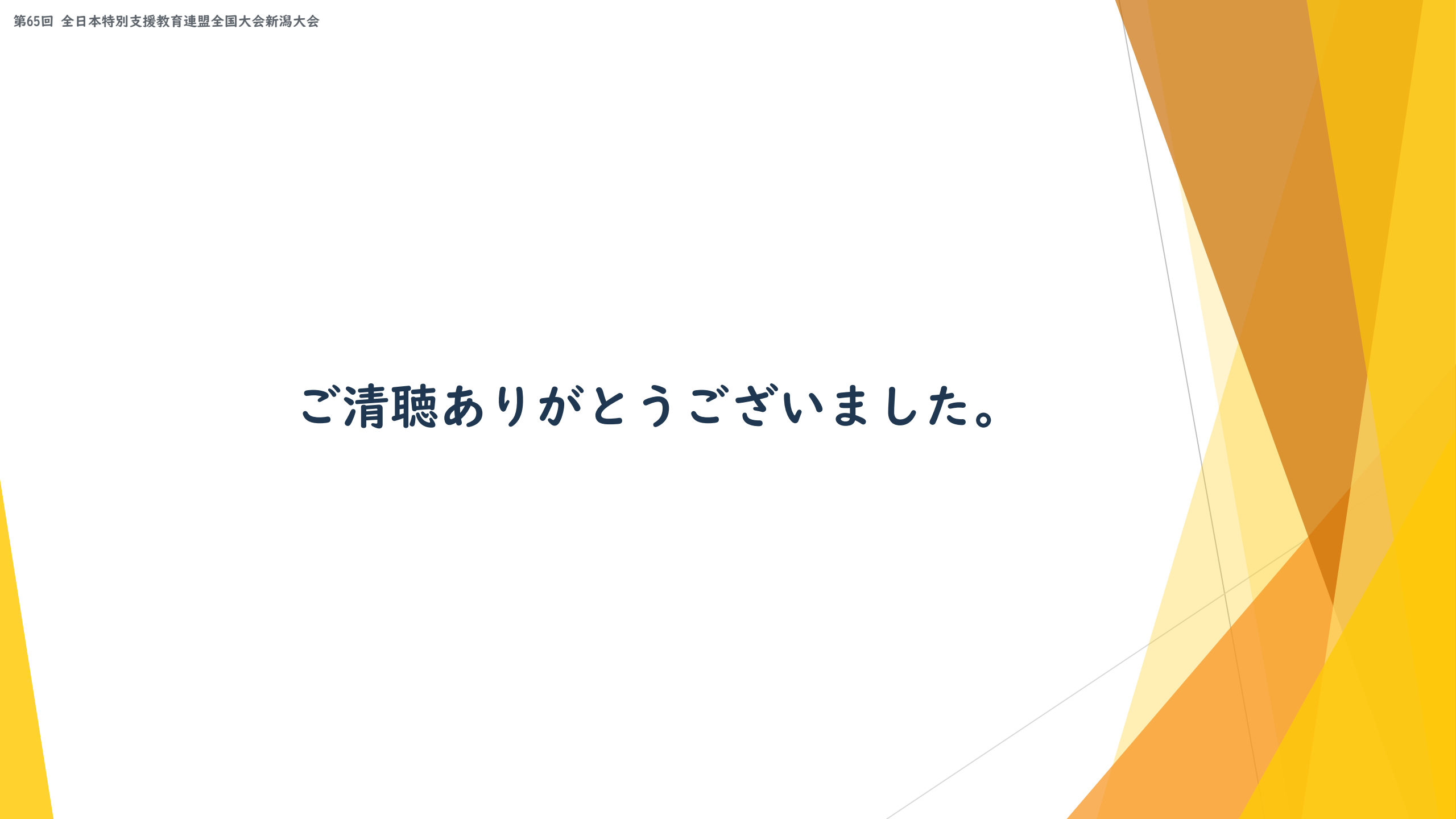
- ・ 地域・企業・教育委員会との継続的なネットワークを育てる
- ・ 生徒が地域で役割を持つ機会をさらに広げる
- ・ 実践を学校内で共有し、教育課程・進路支援につなげる
- ・ 地域の中で、障害のある人もない人も「共に働き、共に学ぶ」経験を増やす

進路指導における地域での課題

- ・地域格差（求人、福祉サービス）
- ・就労準備性を高めることと教育課程
- ・特別支援学校の認知度の低さ
- ・児童生徒の社会経験の少なさ

外部と連携すること＝学校にできない価値観の指導

- ・教員個々の思う社会と実社会とのギャップ
- ・特性＝学校では課題、企業は活かすことに視点
- ・生徒自身の強みの発掘→リフレーミング
- ・学校にない視点でのキャリア教育に繋がる



ご清聴ありがとうございました。